



エフェクチュエーション動学モデルによる起業プロセスの研究 – オートエスノグラフィーによる事例研究 –

川居, 亘孝

(Degree)

博士 (経営学)

(Date of Degree)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9129号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496410>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文審査要旨

氏名 川居 亘孝

論題 エフェクチュエーション動学モデルによる起業プロセスの研究ーオートエスノグラフィーによる事例研究ー

審査 令和7年3月

神戸大学

論文内容の要旨

本論文は、執筆者である川居亘孝が起業したチョコレート事業について、創業から3年間の実践について、バージニア大学のサラス・サラスバシーが開発したエフェクチュエーションの動学モデルをフレームワークとして、オートエスノグラフィーの手法を用いて分析したものである。エフェクチュエーションは、「人間が人工物を作るためのデザイン原則」を究極の目標とするが、エフェクチュエーションを適用したこれまでの研究は、起業のメカニズムに焦点を当てるものが多く、デザイン原則として研究したものは多くない。このような動向に対して、本研究は、エフェクチュエーションのデザイン原則としての新たな展開を目指して、川居が起業した事業を事例にして詳細な分析を行ったものである。

本論文は、6つの章からなり、「1. はじめに」では、本論文の問題意識や分析視角が説明されている。

「2. エフェクチュエーション」では、サラスバシーの理論にしたがって、エフェクチュエーションの動学モデルや5つの原則が説明された後に、エフェクチュエーションに関する先行研究がレビューされる。その結果、これまでのエフェクチュエーション研究は、エフェクチュエーションかコーゼーションかというメカニズムを探究する研究が多く、デザイン原則としてのエフェクチュエーションの展開を目指したものはあまりなく、そこに重要な学問的課題が残されていることを主張している。

「3. 研究方法と事例対象」では、研究方法としてオートエスノグラフィーを採用すること、事例として川居氏が創業した Bean to bar NAGANO を取り上げることが説明される。オートエスノグラフィーに関しては、主観的な記述にならないために第三者の検証プロセスを入れていることが説明され、事例対象については分析対象の3年間の経緯などがまとめられている。

「4. Bean to bar chocolate NAGANO の事例分析」では、NAGANO の創業前、創業後1年目、同2年目の3期に分けて、エフェクチュエーションの動学モデルのフレームワークに依拠して分析が行われている。動学モデルの中心である、「私は誰か」、「私は何ができるのか」、「他の人々との相互作用」、「エフェクチュアルな関与者のコミット」などの具体的な場面を忠実に記述している。その結果、著者の川居が当初は起業など想像しなかった段階から、事業の社会的な意義に気づくまでの「自己の想い」が進化する過程

や、その途中で遭遇する様々な課題を自分が持っている手段で解決し人工物を創造していくプロセスが明らかにされている。

「5. エフェクチュエーションにおける動学モデルのプロセス」では、前章での記述を動学モデルの観点から解釈を行っている。まず、「5.1 動学モデルの各フェーズの特徴と相互関係性」では、動学モデルの各フェーズの意味を再度検討し、動学モデルが NAGANO の事例において機能していることを示した。次に、「5.2 動学モデルの原動力」では、動学モデルのサイクルを回す原動力が「自己の想い」であったことを明らかにしている。そして「5.3 エフェクチュエーションの思考と実践による人工物のデザイン」では、特に商品開発を中心に、動学モデルのサイクルが回ることによって人工物が創造されていくという側面を議論している。

「6. おわりに」では、人工物のデザイン原則としてのエフェクチュエーション研究としての本論文の結論を要約し、実践的インプリケーションを述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、執筆者である川居が起業したチョコレート事業に対して、エフェクチュエーションの動学フレームワークを適用して分析したものである。研究手法としては、オートエスノグラフィーを用いて、創業前の時点から 3 年間の実務を時系列に分析している。エフェクチュエーションは、サラスバシーが、熟達した起業家の行動モデルとして理論化したものであり、これまで多くの事例研究がなされてきたが、本研究は、エフェクチュエーションのデザイン原則としての新たな展開に焦点を当てている点で独自の貢献がある。

これまでのエフェクチュエーション研究は、エフェクチュエーションの 5 原則の適用可能性や、コーゼーションとエフェクチュエーションの実務における適用の相違などが研究対象とされることが多く、サラスバシーがエフェクチュエーション研究の究極のゴールであるとした「人間が人工物をつくるためのデザイン原則」の側面は十分に究明されてこなかった。これは、経営学の学問動向が、システム設計のような工学的な関心ではな

く、経営原理の探求のような学問関心が中心になっているためと推察されるが、起業やイノベーションの促進という観点からは、経営学の分野でも工学的な研究がもっと重視されるべきであり、この点に本研究の第一の意義がある。

さらに本研究では、エフェクチュエーションの動学モデルのサイクルを回す原動力について深く考察し、「自己の想い」が動学モデルのサイクルを回すたびに進化し、それが最も大きな推進力となったことを明らかにしている。これまでのエフェクチュエーション研究では、行為者と研究者が別人格であったため、行為者の内面に深く入り込めなかったが、本研究では行為者自身がオートエスノグラフィーの手法を使って、自己自身の内面を深く探求しているため、この点で類例を見ない知見を提供している。これは、「自己の想い」という内的環境と外的環境の接面に生じる人工物のデザイン原則の展開として重要な貢献である。

また本研究では、エフェクチュエーションの動学モデルの各フェーズが事業の展開において、どのように相互作用してきたかについても詳細に分析しており、動学モデルの実践への適用可能性を実証している点でも意義がある。なお、筆者は神戸大学においてエフェクチュエーションの教育を受けたうえで起業をしており、この点も起業プロセスに大いに影響していることを記述的に明らかにしたことは、今後のエフェクチュエーション研究や教育に重要な示唆を持つ。

上記の理論的貢献に加えて、本研究が記述した、もともと起業を考えていなかった人間が起業をして、エフェクチュエーションのサイクルを回すことで、事業を拡大した事例は、これから起業を考えようとする人々に、起業への足掛かりを与えるという重要な実践的インプリケーションを持つ。起業と言えば、ビジネスプランや資金調達あるいはマネタイズの方法などを思い浮かべやすいが、特に明確な事前の計画がなくても、エフェクチュエーションのサイクルを回すことで「自己の想い」が進化し、事業が発展していくという事実は多くの起業家志望者を勇気づけるであろう。

ただし、本論文にも課題は残されている。エフェクチュエーションをデザイン原則としてみた場合、本論文の重要な概念である「自己の想い」の内的環境の中の位置づけについては、理論的に精緻化すべき余地がある。また、全体的に経済的な制約についての記述が少なく、本ケースでは実際にはそれほど問題ではなかったかもしれないが、多くの起業の事例ではこの点が決定的に重要になるため、もう少し考察があってもよかったかもしれない。ただし、この点は今後の課題として検討することが望まれるものであり、これらの

課題は本研究の価値を損なうものではない。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

令和7年3月7日

審査委員	主査	教 授	國部 克彦
		准教授	吉田 満梨
		教 授	宮尾 学